山田原欽「普賢縁起」訳注稿

独立行政法人国立高等専門学校機構　徳山工業高等専門学校
一般科目　准教授　谷本圭司

Translation and annotation (draft) of Genkin、Yamada (山田原欽) "Fugen Engi (普賢縁起)"

Keiji、TANIMOTO

〔解説〕

「普賢縁起」は、室積（現在の光市室積）の峨眉山普賢寺の由来を記した漢文の文章で、江戸時代初期の萩藩（長州藩）の秀才とうたわれた山田原欽二一歳の時の作である。

「普賢縁起」については、すでに布引敏雄「周防室積普賢寺縁起の系譜」（「山口県文書館研究紀要」第三号　一九七四）があり、「普賢縁起」を記述するにあたって、山田原欽が参考としたであろう資料についての考察、およびその資料的価値についての考察に関しては、詳細にして正鵠を射たものであり、多くの示唆を与えられた。

しかし、現在までのところ、原文そのものに対する訳注の試みはなされておらず、室積出身の本校の学生も普賢寺は身近に知っていても、その由来についての知識を持たない者がほとんどであること、また、この文章には、日本語の表記に漢字を使用した部分を除けば、いわゆる「和習」が全く見られず、漢文としても正統的であることを思うに、この文章が一般のよく知るところはなっていない現状は、まことに残念と言わざるを得ないと感じていた。

このたび、本校機械電気工学科の藤本浩先生より内容を正確に知りたいとの要請をいただいたのを機に、本校の四年次選択科目の講義用参考資料としての利用をも意図して、才の不足を省みず、訳注を試みることにした次第である。

〔訳注について〕

本文は、一般に目にすることがたやすく、活字に翻刻されている『防長寺社由来』（全七巻　山口県文書館　昭和五七年）第二巻　熊毛宰判所収の「室積村　普賢寺　普賢寺由来記」によることにした。原文中には、入力できない漢字があり、その文字については、〈雨／云〉（→雲）、〈衣／甫〉（→補）のように表してある。なお、本文の内容にそって大まかに段落分けを行ったが、これは筆者の考えによるものであり、あくまでも理解に資するためである。また、普賢寺の桝野省堂ご住職から山田原欽直筆の原文を観覧する機会を与えられたが、時間的な制約もあり、詳しい検討は行えていない。これについては詳細な校勘も含め、別の機会に何らかの形で公にすることができればと思っている。

通釈については、徳山高専の学生（四年生）を対象に、努めて平易を心がけて作成したつもりである。講義用の資料ととしての配慮ではなく、彼らにとって理解しやすい文となっていれば、一般の方々にも十分に理解できるレベルの文章になるであろうと考えてのことである。しかし、安易な説明に傾きすぎたきらいもあり、また文章としてのリズムが崩れ、原文の格調を損ねた部分もないとは言えない。諸賢のご教示をいただければ、幸いに思う。

注については、典拠のある場合、あるいは、仏教関係の文献に関連する語については、管見の及ぶ限りにおいて原文を挙げた。引用原文に訓読文を加えて理解をたすけるべきと考えたが、許されたスペースの関係もあって割愛せざるを得なかった。また、それ以外の語についても、平易を旨として煩雑にわたることを避けたため語意を記すにとどめたものも多い。

【本文】

普賢縁起

夫薩埵之威福、雖無所不至、済度之蹤跡、未必不択其境焉。故其精爽

之所存、山因之増秀、海因之重潤也。

粤周防国熊毛郡室積里者、普賢菩薩示現之地也。積年此里有婦人、称武下殿、種族最貴、信心堅固、実孕普賢菩薩焉。既誕、長入摂津国江口里、友宇治橋姫而遊也。

書写性空上人者、平安城人也。父従四位下橘善根（ヨシネ）、母源氏、生十歳持妙法華、年三十六出家。尋幽而往日州霧島、結廬而居焉。後相攸於播州書写山、証菩提心、得六根浄、常願親拝生身普賢菩薩而不措。一夜夢有人告曰、欲遂汝所願、盍往摂州江口里而求也。越乃往江口而徘徊、竟無所応焉。嘆息之間、忽見彩舟之逍遙于江上、遊女端坐而拍鼓、歌曰、周防 奈留 室積 乃 中 乃 御手濯 爾 風 波 不吹 止毛 小波（ササ〔ら〕ナミ）立 云々。

上人甚怪、瞑目而静思、則遊女応現普賢之貌、乗六牙白象、出眉間光相照道俗之人、以微妙之音声説曰、実相無漏 乃 大海 爾 五塵六歎〔「欲」？〕乃 風 波 不吹 止毛 随縁真如 乃 波 乃 不立時 奈志 云々。上人信感満胸、涕涙凝眶、強一開目、即遊女方調周防室積之曲、依然而未了。怪而瞑目、即復現菩薩形、演法文如前。

若此者数回、上人合掌敬礼、不勝宿願、欲攀其舟。便夫象尾留上人之手中、普賢忽然而無跡矣。無数遊人見失遊女、驚訝千端、但応時有異香満空而已。象尾見在書写山云、鼎湖竜遠宝弓空落群臣之手、台山日落芳言猶在無着之耳。

上人感慕滋深、更縁江海而西至于周防国室積浦。訪浦人曰、無有奇事乎。浦人曰、有諸。近魚網之設木仏麗之形相端厳、浦人畏憚而捨於海渚、上人喜得未曾有、就拝之、則嚮之所現生身普賢菩薩、而毫無差異。時復浦人携普賢菩薩所乗象及蓮華台来云、此物近升於小郷浦。小郷浦在室積之東若干里。上人大喜、擬像于其上、莫不胎合矣。今像下連花白象是也。

上人欲伝其事蹟後代、倒植松株于其地以表之。其株至今猶存、俗称曰対面之松。遂起一宇之堂于浦之大多和羅山、以安置所謂普賢菩薩之像、且供養之、号山曰娥媚、寺即繋普賢之名。後薩州沙門曰禅玄宥、深信此尊像而帰仰之云、堂之旧地在高山之巓、嶮径紆途非無老雅士女之艱於往来者也。因移建于今所矣。

若夫武下殿之居趾、今在山下、与普賢堂相距十町余。熟惟異朝喜州峨嵋山周廻千里、重巌複澗不測遠近。山有光相寺、為普賢示現之地。山之取名因両山相対而如娥媚也。本朝有此山、則崒然而具大象之全軀。是以有地曰象鼻、今弘法大師堂所存是也。至若浦之名、既称菩薩之微説、則浪音風〈口／甬〉、莫非菩薩之蹤跡也。其為勝区誰敢間然耶。

伏冀薩埵霊在上如日、至千億千万歳、上流慶于国家、下溥利于群生、寿寧康福、錫以悠久也。

是以為縁起。

峩嵋山自寛弘三年性空上人示寂、来距今六百七十有九年、夫普賢像之本縁由伝尚矣。且旧記所録符節存焉処、在縁起旧本、多鄙俗語、不可以示久遠。寺見住瑞巌憂之。時毛利市正大江就直為防長二国之当路、使僕修其縁起、以可伝遠編成。就直装復成軸、以寄附于娥媚云

貞享三年　丙寅　季秋　初三日

復軒山田原欽撰拝書

〔訓読文〕

普賢縁起

夫れ薩埵の威福は、至らざる所無しと雖も、済度の蹤跡は、未だ必ずしも其の境を択ばざるなり。故に其の精爽の存する所、山は之を増秀なるに因り、海は之を重潤なるに因るなり。

粤（ここ）に周防の国 熊毛郡 室積の里なる者は、普賢菩薩の示現の地なり。積年　此の里に婦人有り、武下殿と称し、種族は最も貴に、信心は堅固にして、実は普賢菩薩を孕む。既に誕（うま）れて、長じて摂津国の江口の里に入り、宇治の橋姫を友として遊ぶなり。

書写の性空上人なる者は、平安城の人なり。父は従四位下 橘善根（ヨシネ）、母は源氏、生れて十歳にして妙法華を持し、年三十六にして出

家す。幽を尋ねて日州霧島に往き、廬を結んで居せり。後に播州書写山に相攸し、菩提心を証し、六根浄を得、常に生身の普賢菩薩を親拝せんと願いて措かず。

一夜 夢に人有りて告げて曰く、「汝の願う所を遂げんと欲すれば、盍（なん）ぞ摂州の江口の里に往きて求めざらんや」と。越えて乃ち江口に往きて徘徊するも、竟に応ずる所無きなり焉。嘆息の間に、忽ち彩舟の江上に逍遙するを見る。遊女 端坐して鼓を拍ち、歌いて曰く「周防なる室積の中の御手濯に風は吹かねども小波（ササ〔ら〕ナミ）立つ、云々」と。

上人 甚だ怪しみ、瞑目して静思すれば、則ち遊女応じて普賢の貌を現じ、六牙の白象に乗り、眉間の光を出だして道俗の人を相照らし、微妙の音声を以て説いて曰く、「実相無漏の大海に五塵六欲〔「欲」？〕の風は吹かねども随縁真如の波の立たざる時なし、云々」と。

上人 信感 胸に満ち、涕涙 眶（まかぶら）に凝し、強いて一たび目を開けば、即ち遊女 方に周防室積の曲を調し、依然として未だ了らず。怪しみて瞑目すれば、即ち復た菩薩の形を現じ、法文を演（の）ぶることは前の如し。此くの若きこと数回、上人 合掌敬礼し、宿願に勝（た）えず、其の舟に攀らんと欲す。便（すなわ）ち夫の象尾 上人の手中に留まり、普賢は忽然として跡無し。無数の遊人見るに遊女を失い、驚き訝りて千端なり。但だ応ずるの時に異香の空に満つること有るのみ。象尾の書写山に見在するに云う、「鼎湖の竜は遠くして 宝弓は空しく群臣の手に落ち、台山の日は落ちて 芳言は猶お無着の耳に在るがごとし」と。

上人 感慕すること滋ます深く、更に江海に縁りて西のかた周防の国室積の浦に至る。浦の人を訪いて曰く、「奇事有りや無しや」と。浦の人 曰く、「諸（これ）有り。近ごろ魚網の設くるや木仏の麗しきの形相端厳たるあり、浦の人 畏れ憚かりて海渚に捨つ」と。上人喜びて未だ曾（かつ）て有らざるを得、就ち之を拝すれば、則ち嚮（さき）の現ずる所の生身の普賢菩薩にして、毫（いささか）も差異無し。時に復た浦の人の普賢菩薩の乗りし所の象及び蓮華台を携えて来りて云う、「此の物近ごろ小郷浦に升れり」と。小郷浦は室積の東 若干里に在り。上人 大いに喜び、其上に像を擬するに、胎合せざる莫し。今 像の下の連花・白象 是なり。

上人 其の事蹟を後代に伝えんと欲し、松株を其の地に倒植し以て之を表す。其の株 今に至るまで猶お存し、俗に「対面の松」と称す。遂に一宇の堂を浦の大多和羅山に起（た）て、所謂普賢菩薩の像を安置するを以てし、且つ之を供養し、山を号して娥媚と曰い、寺は即ち普賢の名に繫げり。後に薩州沙門 禅玄宥と曰うもの、深く此の尊像を信じて之に帰仰して云う、「堂の旧地は高山の巓に在り。嶮径紆途 老雅士女の往来に艱（くる）しむ者無きに非ざるなり」と。因りて今の所に移建す。

夫の武下殿の居趾の若きは、今 山下に在り、普賢堂と相距たること十町余なり。熟（ふか）く惟（おも）うに異朝の喜州峨嵋山は周廻千里にして、重巌複澗 遠近を測らず。山に光相寺 有り、普賢示現の地と為す。山の名を取れるは両山相対して娥媚の如きに因るなり。本朝に此の山有るは、則ち崒然として大象の全軀を具（そな）う。是を以て地に象鼻と曰える有り、今 弘法大師堂の存する所 是なり。浦の名の若きに至りては、既に菩薩の微説を称し、則ち浪音風〈口へんに甬、音読みはヨウ〉、菩薩の蹤跡に非ざる莫きなり。其の勝区たるや誰か敢えて間然とせんや。

伏して冀わくは薩埵の霊 上に在ること日の如く、千億千万歳に至るまで、上は流慶于国家、下は溥利于群生、寿寧康福、錫するに悠久を以てするを。是を以て縁起と為す。

峩嵋山は寛弘三年 性空上人 示寂せしより、来り距（へだ）たること今に六百七十有九年、夫の普賢像の本縁由伝は尚（ひさ）し。且つ旧記 録する所の符節 焉に存する処にして、縁起の旧本 在れども、鄙俗の語多く、久遠に示すを以てすべからず、寺の見住 瑞巌 之を憂う。時に毛利市正大江就直 防長二国の当路と為り、僕をして修其の縁起を修し、遠きに伝うべきを以て編成せしむ。就直 装し復た軸と成し、娥媚に寄附する

を以てすと云えり。

貞享三年　丙寅　季秋　初三日

復軒　山田原欽　撰し拝して書す

【通釈】

普賢縁起

そもそも大菩薩さまの賞罰は、及ばぬ所などないとはいえ、〔衆生を〕救済し悟りを開かせた跡は、必ずしもその境地を択ぶものではない。それゆえ、その精神の存在する所は、山はいや増しに秀でるものにちなみ、海は重ねて広く深いものにちなむのである。

さて、周防の国　熊毛郡　室積の里は、普賢菩薩がそのお姿を現された地である。長年、この里に婦人がおり、武下殿と呼ばれ、種族は最も高貴であり、その信心は堅固であって、実は普賢菩薩さまを宿されたのであった。〔宿った普賢菩薩さまは〕誕生されて、成長して摂津国の江口の里に入り、宇治の橋姫を友として遊びなさった。

書写山の性空上人という者は、平安京の出身である。父上は従四位下橘善根（たちばなのよしね）、母上は源氏の出であり、生まれて〔わずか〕十歳で『妙法蓮華経』を受持し、三十六歳で出家した。幽を尋ねて日向の国　霧島に往き、廬を結んでその地に住んだ。その後、播磨の国　書写山に居住し、菩提心を証（あかし）し、六根清浄を得て、常に人間の姿をとって現れた普賢菩薩を親しく礼拝したいと願ってやまなかった。

ある夜、夢に人が現れて告げることに、「おまえの願いをかなえたいならば、どうして摂津の国の江口の里に往って求めないのか」と。〔上人は遠路を〕渡って〔行き〕そこで江口に往って徘徊したが、結局、〔上人の〕願いに応（こた）えるできごとなどは無かった。嘆息しているとき、ふと彩りも鮮やかな舟が江上に逍遙するのが目に入った。舟の上では遊女が居ずまいを正して鼓を打ち、歌っていうには「周防にある室積の浦の中の御手濯に風は吹かないけれどもさざ波が立つことよ、云々」と。

上人はひどく不思議に思い、目を閉じて静思〔心静かに〕すると、その遊女は応（こた）えて普賢菩薩の姿を現し、六牙の白象に乗り、眉間から光を放って僧侶をも俗人をも照らし、なんともいえぬ美しく趣き深い声で仏の教えを説いて言う、「実相無漏の大きな海に五塵六欲の風は吹かないけれども、随縁真如の波が立たない時はない、云々」と。

上人は信心の感動が胸に満ちあふれ、涕涙は眶（まかぶら）にいっぱいに集まり、無理やりに一度 目を開けると、遊女はちょうど周防室積の曲を奏でて、元のとおりでまだ曲は終わっていない。不思議に思って目をつむると、再び普賢菩薩の姿を現し、教義を述べて その文は前と同じであった。

このようにすること数回、上人は合掌して敬い拝み、宿願に我慢ができず、遊女の乗る舟によじ登ろうとした。〔その時に上人がつかんだ普賢菩薩の乗る〕白象の尻尾がそのまま〔抜けて〕上人の手の中に留まり、普賢菩薩は一瞬のうちに跡形も無く消えた。無数の遊客たちは遊女の姿を視界から失い、驚き不審がって混乱し〔騒ぎになっ〕た。ただ普賢菩薩の姿を現じた時に嗅いだこともない香が空に満ちただけであった。書写山に現存する白象の尻尾〔の説明〕に、「鼎湖の竜は遠くして 宝弓は空しく群臣の手に落ち、台山の日は落ちて 芳言は猶お無着の耳に在るがごとし〔伝説の天子である黄帝が龍に乗って去る時に鼎湖に落とした宝の弓は空しく臣下のものとなり、五台山で日没の後に文殊菩薩の芳しき教えの言葉が無著禅師の耳に残ったのと同様である〕」とある。

上人の感動し思慕することはますます深まり、さらに江海を渡って西方の周防の国　室積の浦にまで来た。浦の住人を訪問して、「不思議なことはありませんでしたか」と言うと、浦の住人は「有りました。近ごろ魚網を仕掛けましたら麗しき御顔で整って威厳のある木仏がかかり、浦の人々は畏れ憚かって海に捨てました」と言う。上人は喜んで、これまでに無かった珍しい〔木仏〕を〔海から引き上げ〕手に入れて、拝礼し

たところ、前に〔江口で〕示現なされた生身の普賢菩薩〔そのままの姿〕であり、少しの違いも無かったのである。折しもまた浦の住人が普賢菩薩の乗られていた白象と蓮華台を持ってやって来て、「これらの物が近ごろ小郷浦で〔海から〕上がりました」と言う。小郷浦は室積の東 数里に在る浦である。上人はたいそう喜び、その白象と蓮華台の上に〔普賢菩薩の〕像を合わせてみたところ、ぴったりと合わさったのであった。今の普賢菩薩の木像の下の連花台と白象が、これである。

上人はこの事蹟を後の世に伝えようと思い、松の樹をこの地に逆さまに植えてその印とした。その樹は今に至るまで残っており、俗に「対面の松」と呼ばれている。かくして一宇の堂を浦の大多和羅山〔おおたわら山？〕に建立して、普賢菩薩の像を安置申し上げて、さらに供養を行い、その山を娥媚と名付け、寺は普賢菩薩の名に繋げたのである。後に薩摩国の沙門 禅玄宥という者が、深くこの尊像を信じて帰依渇仰して「堂のもともと立つ地は高い山の巓にある。険しく曲がりくねった道に高齢の人や雅な女性は行き来に苦労する者が必ずいる」と言った。それゆえ今の場所に移設したのである。

さて、武下殿の住居趾は、今は山の下にあり、普賢堂と距たること十町余である。熟考するに、中国の喜州にある峨嵋山は山の周囲千里であって、重なりあった岩山や複雑な谷川があって遠近を認識できない。山には光相寺があり、普賢菩薩の示現の地である。山の名は二つの山が向き合い娥媚のようであることから取っている。日本にあるこの〔名の〕山は、高く聳えて、大きな象の全体を備えている。そういうわけで、この地には象鼻というところがあり、それは今、弘法大師堂のあるところなのである。浦の名ということになると、既に普賢菩薩の〔示現の〕故事に見えており、浪の音も風の歌も、全てが菩薩の事跡でないものはない。その名勝の地であることに、いったい誰が不埒にも口を挟めようか。

伏して願う、薩埵の霊が天に在ること太陽のように、千億千万歳に至るまで、上は慶ばしきことを国家に伝え、下はご利益を多くの人々に広げ、長寿、安寧、幸福、健康であって、それが悠久に与えられますように、と。以上、縁起とするものである。

峩嵋山は、寛弘三（一〇〇六）年に性空上人が示寂なされ、以来、今までに六百七十九年、普賢菩薩像の縁起由来は久しく時を経たものとなってしまった。その上、古い記録が記された符節は現存していて、縁起の旧本が存在するけれども、卑しく低俗な言葉が多く、久遠の未来に示すべきものではなく、寺の現住である瑞巌はこれを憂いていた。時に毛利市正大江就直さまは、防長二国の重要な役職にあり、私に普賢寺の縁起をまとめ、遠く未来に伝えられるように編集させたのである。就直さまは、その縁起を装丁して軸として、娥媚山普賢寺に寄附なされたということである。

貞享三（一六八六）年 丙寅 季秋 初めの三日

復軒 山田原欽 撰述し拝して書き記す

【注】

○薩埵

サンスクリット語 bodhisattva菩提薩埵の略。菩薩（求道者）のこと。ここでは普賢菩薩のことであろう。

○濟度

衆生の生死の海に沈んでいるのを救済し彼岸に渡らせること。『妙法蓮華経』方便品に「終不以小乗濟度衆生」とある。

○蹤跡

事跡のこと。

○精爽

精神のこと。『春秋左氏伝』昭公七年に「用物精多、則魂魄強、是以有精爽至於神明」とある。

○示現

仏や菩薩が人々を救うためにさまざまな姿に身を変えて現れること。

○宇治橋姫

「橋姫」は、橋を守る女神。「宇治橋姫」は、宇治橋の橋姫神社に祀られている「宇治の橋姫」を指す。巫女、遊女、愛人と広い意味をこめて使われる語。

○書写

書写山円教寺のこと。

○平安城

平安京のこと。

○受持

仏の教えを受けて心に念じて持ち続けること。また戒法（かいほう）を受け保つこと。要するに、常に仏の教えに導かれて自らの行動を律するように心がけることであるが、この部分の記述に合わせれば、「『法華経』の教えに導かれて自らの行動を律する」の意味であろう。

○日州

日向国をいう。

○攸

居住するの意。

○播州

播磨国をいう。

○菩提心

無上正真道を求める心。悟りと衆生救済を強く願う心のこと。『大乗義章』巻九（大乗義章（Ｎｏ．一八五一　慧遠述）ｉｎ Ｖｏｌ．四四）「發菩提心者、菩提胡語、此翻名道。果德圓通故曰菩提。於大菩提起意趣求、名發菩提心。」とある。

○六根浄

六根清浄。六根の執着を断ち、清浄な精神を所有し霊妙な術を修得すること。『妙法蓮華経』法師功德品に「若善男子善女人、受持是法華經、若讀若誦、若解說、若書寫、是人當得八百眼功德、千二百耳功德、八百鼻功德、千二百舌功德、八百身功德、千二百意功德。以是功德莊嚴、六根皆令清淨」とあり、『普賢觀經』（『佛說觀普賢菩薩行法經』（Ｎｏ．○二七七　曇無蜜多譯）ｉｎ Ｖｏｌ．○九）に「樂得六根清淨者、當學是觀」とある。

○生身（しょうしん）

人間の姿をとって現れること。

〔補注〕

性空上人の伝記資料としては、以下の二つが基本である。

・鎮源　撰『本朝法華驗記』巻中「第四十五　播州書寫山性空上人」（『續群書類從』巻一九四　第八輯上　所収、『日本思想体系』第七巻所収）長久年間（一〇四〇～一〇四四）の成立

・承澄　撰『明匠略傳』日本　下「性空上人」（『群書類從』巻六八　第五輯　所収）建治元（一二七五）年の成立

○端坐

居ずまいを正すこと。

○御手濯

『防長風土注進案』熊毛宰判　室積浦　室積浦風土記に「一、港　壹ケ所（中略）當港之内　御手洗と申ハ人皇拾五代の帝神宮〔「宮」、傍記「功」〕皇后三韓に起〔傍記、「赴」〕き、玉ふ折から、此津に御船を維（つなが）せ玉ひ御手を洗ハせ給ふによって御手洗と名つけたりと申傳へり」とある。

○不吹 止毛

吹かねども

○小波（ササナミ）

『防長寺社由来』は、ルビに「ササナミ」と記すが、『古事談』第三、『十訓抄』第三　不可侮人倫事に見える、性空上人と普賢菩薩の説話によって、「ささらなみ」と読むほうがよい。ささらなみは、細(ささ)ら波。小波。さざ波。さらさらの音の意味もある。

○瞑目
『往生要集』上本に「當知草庵瞑目之間、便是蓮臺結跏之程」とある。
○静思
心を静かにして思いめぐらすこと。
○六牙白象（ろくげ‐の‐びゃくぞう）
普賢菩薩が乗る六つの牙の白い象。『普賢觀經』（『佛説觀普賢菩薩行法經』（Ｎｏ．〇二七七 曇無蜜多譯）ｉｎ Ｖｏｌ．〇九）に「普賢菩薩。即於眉間放大人相白毫光明。此光現時。普賢菩薩身相端嚴。如紫金山。端正微妙。三十二相皆悉備有。身諸毛孔放大光明。照其大象令作金色。一切化象亦作金色。諸化菩薩亦作金色。其金色光。照于東方無量世界。皆同金色。南西北方四維上下亦復如是。爾時十方面一一方。有一菩薩。乘六牙白象王。亦如普賢等無有異。如是十方無量無邊滿中化象。普賢菩薩神通力故。令持經者皆悉得見。」とある。
○道俗
仏道に入っている人と俗世間の人。僧侶と俗人。
○微妙
なんともいえず美しく趣き深いさま。
○實相無漏（じっそうむろ）
煩悩のない、ありのままの姿。真如実相（世界の真実本質の姿）には迷いや欲望が全く存在しない（＝無漏）こと。
○大海（だいかい）
「海」は、一切の功徳を蔵するもののこと。
○五塵
五塵は塵のように人の心を汚すもと。色、声、香、味、触の五境。『摩訶止観』巻四上に「死事弗奢、那得不怖。怖心起時、如履湯火。五塵六欲、不暇貪染」とある。
○六歎
「歎」は、翻刻の際に「欲」を読み誤ったものである。本稿末尾に付した、普賢寺に伝わる山田原欽直筆の「普賢縁起」は「欲」に作っている。「六欲」は、色欲、形慾（容貌）、威儀姿態慾、言語音声慾、人相慾、細滑慾（美肌）のことであり、『大智度論』巻二一に見える。
○随縁真如
縁によって種々の現象として生じる存在の本質。華厳宗天台宗における実大乗においては、真如（万物の本質）に、不動不変の真如（不変真如）と、不変の水が外からの風によってさまざまな波を生ずるように、外来の縁に応じて森羅万象を現じる随縁真如の二相を立てる。起きた波が水の性質を失うことがないように、森羅万象の事相はその本質である真如を失うことがない。真如即萬法であり、萬法即真如である。この部分は、不変真如を水になぞらえ、随縁真如を波になぞらえた表現であろう。『金剛錍』（Ｎｏ．一九三二 湛然述 『大正新脩大蔵経』による）に「應知萬法是真如、由不変故、真如是萬法、由随縁故」とある。
○眶（まかぶら）
目のふちのこと。
○凝
集まるの意。
○周防室積之曲
前の「周防なる～」の歌を指す。
○法文
仏の教えを説くことば。ここは、「仏の教え」のほうが意味合いとして落ち着きがよい。
〔補注〕
以上までに関する他所の記載として、以下①～⑤がある。また、
① 「鹿苑院殿嚴嶋詣記」（『群書類従』巻三三三所収）
② 『古事談』第三 僧行〔国立国会図書館デジタルコレクション所収 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2533115〕
③ 『十訓抄』第三 不可侮人倫事〔早稲田大学図書館古典籍総合データ

ベース所収
http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko30/bunko30_e0151/bunko30_e0151_0001/bunko30_e0151_0001.html〕

④『撰集抄』巻六「性空上人事 付室遊女」〔早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he12/he12_01708/index.html〕

⑤謡曲「江口」〔観世流謡曲〕

○攀
とりすがるの意。

○象尾
六牙の白象の尻尾のこと。

○千端
千端萬緒。ものごとが混乱しひどく紛れあうさま。『漢武帝内傳』に「求道益命、千端萬緒、皆須五帝六甲靈飛之術」とある。

○鼎湖竜遠宝弓空落群臣之手
『史記』巻二八 封禅書に「黄帝采首山銅、鑄鼎於荊山下。鼎既成、有龍垂胡髯下迎黄帝。黄帝上騎、群臣後宮從上者七十餘人、龍乃上去。餘小臣不得上、乃悉持龍髯、龍髯拔、墮、墮黄帝之弓。百姓仰望黄帝既上天、乃抱其弓與胡髯號、故後世因名其處曰鼎湖、其弓曰烏號。」とある。

○台山日落芳言猶在無着之耳
「台山」は、五臺山。「無着」は、無著禅師のこと。『神僧傳』（No.二〇六四）inVol.五〇〔ナンバー、巻数は『大正新脩大蔵経』〕に、「無著文喜禪師。入五臺山求見文殊。忽見山翁。著揖曰、願見文殊大士。翁曰、大士未可見。汝飯未。著曰未。翁引入一寺引著升堂命坐。童子進玳瑁杯。貯物如酥酪。著飲之覺心神清朗。翁曰、南方佛法如何住持。著曰、末代比丘少奉戒律。曰多少衆。曰或三百或五百。著問、此間佛法如何住持。曰龍蛇混雑凡聖同居。曰衆幾何。曰前三三後三三。遂談論及暮。翁命童子引著出。行未遠悽然悟翁即文殊也。不可再見。稽首童子乞一言爲別。童子有無垢無染即眞常之語。言訖童子與寺倶隱。但見五色雲中文殊乘金毛獅子往來。白雲忽覆之不見。」とある。

〔補注〕
普陀山、五臺山、峨眉山、九華山を四大名山という。『普陀山志』巻一に「佛經稱地藏普賢文殊觀音諸道場曰地水火風。為四大結聚。九華、地也（地藏）。峨眉、火也（普賢）。五臺、風也（文殊）。普陀、水也（觀音）」とあり、普陀山は觀世音菩薩、五臺山は文殊菩薩、峨眉山は普賢菩薩、九華山は地藏菩薩のそれぞれ住まうところとされた（丁福保『佛学大辞典』の解説による）。

また普賢菩薩と文殊菩薩は、釈迦如来の脇侍として対の存在であり、この部分は

（峨眉山に住まう普賢菩薩が消える時に残した白象の尻尾）
↓「黄帝が天に上る時に落とした（＝残した）弓」

［対応］
五台山に住まう文殊菩薩が消える時に
↓無著に残した言葉

という連想による表現であろう。

○感慕
心に思い慕うこと。

○縁
拠り所とする。引き寄せられる。

○奇事
不思議なこと。

○端厳
整って威厳のあるさま。『普賢觀經』（『佛説觀普賢菩薩行法經』（No.〇二七七 曇無蜜多譯）inVol.〇九）に「普賢菩薩身相端嚴。

如紫金山。」とある。〔前の「六牙白象」の注を参照〕

○小郷浦

文中に「小郷浦在室積之東若干里」とあるので、室積湾から東へ数里、「小郷」の読みに当てはまる場所を求めると、東へおよそ八ｋｍの地点に、現在の山口県熊毛郡田布施町麻郷（おごう）が見つかる。なお、この記述から、山田原欽が、一里を約三・九三ｋｍという日本の「里」の単位で記述しており、中国の「里」（約五〇〇ｍ）で記述していないことがわかる。

○擬

はかる。「度」に同じ。物差しではかる。大きさを比べ合わせる。

○脗合

吻合。ぴったりと一致すること。

○倒植

枝が下に向かって伸びるように植えること。

○松株

「株」、「樹」の読み誤りか？『防長風土注進案』熊毛宰判 室積村「熊毛郡室積村風土記」の名所舊跡之事に、この部分に関して「山田復軒先生普賢縁記略云、上人欲傳其事蹟後代、倒植松樹。至今猶存、俗對面之松」とあり、「松樹」に作っているからである。

○対面之松

『防長風土注進案』熊毛宰判 室積浦「室積浦風土記」の名所舊跡之事に「對面松 影向松とも云 北町ニ有り」とある。

〔補注〕

『防長風土注進案』熊毛宰判 室積浦「室積浦風土記」の名所舊跡之事に以下の碑文を載せる。

周防國熊毛郡峨嵋山對面松古蹟之碑

此記中所謂對面松之處、普賢之靈蹟也。享保十八年、野火蔓延、故松遂毀折。寔可痛惜矣。其或所以觀流之為不流、變易之為不易邪。今主簿 藤原平章① 深恐人不識其靈場 繼植松樹、又②邑人立③之石。夫佛身無我、實相無④方、機縁無常、慧光無量。薩埵之悲願、其何色身之不現此土、即寂光寧有感而不應乎。是故有智者勿於是生疑、無智者譏謗泥犂⑤無出期焉。

天保五年甲午之秋 中村任 撰并書

〔校〕

①「今主簿 藤原平章」、傍記「郡吏 広瀬孫右衛門 ィ」

②「又」、原文「父」。傍記によって改めた。

③「立」、傍記「建 ィ」

④「無」、傍記に「無、脱」とあるによって補う。

⑤「犂」、原文「梨」、傍記に「犂」とあるによって改めた。

〔周防の国 熊毛郡 峨嵋山 対面松古蹟の碑 此の記の中に謂う所の対面松の処は、普賢の霊蹟なり。享保十八（一七三三）年、野火 蔓延し、故に松 遂に毀折す。寔に痛惜すべきかな。其れ或いは観流の不流と為し、変易の不易と為す所以ならんや。今 主簿 藤原平章人の其の霊場を識らざるを深く恐れ、松樹を継植す。又た邑人 之に石を立つ。夫れ仏身に我無く、実相に方無く、機縁に常無く、慧光に量無し。薩埵の悲願、其れ何ぞ色身の此の土に現ぜず、即ち寂光の寧ろ感ずる有りて応ぜざらんや。是の故に、智有る者は是に於いて疑いを生じる勿く、智無き者は譏謗して泥犂に出すこと無きを期せん。 天保五（一八三四）年甲午の秋 中村任 撰し并びに書す〕

○大多和羅山

未詳。現在の光市室積の峨眉山、あるいは大峰山か。

○薩州沙門曰禅玄宥

『防長風土注進案』熊毛宰判 室積村「熊毛郡室積村風土記」に載せる「普賢縁起譯文略」の「後に禪玄宥なるもの」の個所に「（付箋）△薩州沙門禅宗大林玄宥大和尚」と傍記。『防長寺社由来』熊毛宰判 室積

村 普賢寺 「普賢寺由来記」に「一、開山　薩州の沙門禅宗大林玄宥大和尚　長久二年巳ノ五月朔日寂ス」〔長久二年は西暦一〇四一年〕とあり、普賢寺の開山である。

○帰仰

帰依渇仰。深く帰依し厚く信仰すること。

○巓

いただき。山頂。

○嶮径

険阻な道。

○紆途

曲がりくねった道。

○老雅

高齢で高貴なの意。

○艱

なやむ。くるしむ。

○武下殿之居趾

『防長風土注進案』熊毛宰判 室積村 「熊毛郡室積村風土記」の舊跡の項に「竹下殿　古趾　普賢出生の地今纔かに殘れり、古墓存在す」とあり、『防長風土注進案』の記事が書かれた天保期にも古跡が残っていたことが知られる。

○十町余

十町は、約一〇九〇・八m。

○異朝

異なる王朝。ここは、中国を指す。

○喜州

「喜」では意味が通じない。翻刻の際に「嘉」を読み誤ったのであろうか。以下の「因両山相対～」の注に『太平御覧』を挙げたが、そこでは峨眉山を嘉州の項に記している。また、南宋 范成大『呉船録』巻上に「丁亥、戊子、己醜、庚寅、辛卯、泊嘉州。遣近送人馬、歸者十九。留家嘉州岸下、單騎入峨眉。有三山、為一列、曰大峨、中峨、小峨。中峨、小峨昔傳有遊者、今不復有路。惟大峨一山、其高摩霄、為佛書所記普賢大士示現之所。自郡城出西門、濟燕渡水、洶湧甚險。此即雅州江、其源自嶲州邛部合大渡河、穿夷界千山以來。過渡、宿蘇稽鎮。」とあり、明 曹學佺『蜀中廣記』巻十一 名勝記第十一 上川南道 嘉定州 峩眉縣に「予按、名山記、峩眉山、周匝千里、石龕百一十二、大洞十二、小洞二十八、南北有台。凡遊大峩者、自縣勝峰門出至華嚴院恰十五里。前代於峩眉山剏寺六、光相、居山絶頂為遊山之底極、華嚴、居山之前峰為游山之嚮導、而白水寺居其中。自白水至光相、歴八十四盤、山徑如線。如是者六十里、至峰頂即普賢示現處。屋皆以板為之」とある。

○重巌

重なりあった岩山。

○複澗

複雑に流れる谷川。

○因両山相対而如娥媚也

『太平御覧』巻一一六 嘉州「『益州記』曰、峨眉山兩山相對、望之如峨眉」とある。

○娥媚

蛾眉。蛾〔＝蚕の成虫〕の触角の形の眉。細長く曲がって美しい眉。美人の眉のたとえ。

○崒然

高くそびえるさま。

○弘法大師堂

『防長寺社由来』の「防州熊毛郡室積村　象鼻山海蔵寺旧記」に「一、弘法大師堂　壱宇　但、弘法大師渡唐の節、象鼻山へ御寄り二夜三日護摩供養被成候て、右の尊像御作ニて石ノ堂へ入残被置由申伝候事。尤縁記の儀ハ普賢寺より縁記ニ書加有之普賢寺より写ニ相成出申候事、堂

普請の儀ハ室積浦より仕来申候事」（第二巻二一二頁）とある。

○象鼻

現在の光市室積象鼻ヶ岬。

○微説

断片的な言い伝え。

○浪音風〈ロ／甬〉

〈ロ／甬〉について、音はヨウ、「むかつく」の意であるが、意味が通じない。普賢寺に伝わる山田原欽直筆の「普賢縁起」は、この字をはっきりと「嘯」（声を長く引いて歌うこと）に作っており、いかなる理由による誤りであるのか理解に苦しむ。ここは「嘯」字で解釈した。

○勝区

景色のすぐれたところ。景勝地。

○間然

異議。ここは異議をさしはさむの意に解釈する。

〔補注〕室積の峨眉山の地名の由来を、山田原欽は、

・中国の峨眉山　普賢菩薩示現の地

美女の眉（↑普賢菩薩　遊女の一部）

・本朝の峨眉山　普賢菩薩示現の地

象の鼻（↑普賢菩薩の乗る六牙白象

＝普賢菩薩の表象の一部）

ともに、普賢菩薩が示現なされたことが確実な土地であること、普賢菩薩の表象の一部が土地にあること、以上の二点の共通項を明示し、根拠づけて説明しようとしたのであろう。

○溥

あまねく施すこと。

○寿寧康福

福壽康寧ともいう。祝頌の語で、幸福、長壽、健康、安寧などもろもろの福がすべて備わること。

○錫

与えるの意。

○寛弘三年

西暦一〇〇六年。『防長寺社由来』の「峨嵋山普賢寺由来記」（第二巻一九八頁下）には「一、当寺は寛弘三年の建立、峨嵋山普賢寺と申候。普賢示現の霊場也。開基性空上人同四年三月十三日寂ス。齢八十ニして」とあり、『防長風土注進案』熊毛宰判　室積村　「熊毛郡室積村風土記」寺院　禅宗峨嵋山普賢寺　同境内の項に「碑銘　山田復軒〔傍記、「原欽」〕先生撰述　寺傳、開基性空上人寛弘四年三月十三日寂、葬於此」とある。

また、『群書類従』巻六八『明匠略傳』日本下に収める「性空上人伝」には、「寛弘四年三月十日未時、遂結定印、向西座禅、安禅昇霞。歳八十」とあって、いずれも性空上人の寂した年を寛弘四年としている。ここに山田原欽が貞享三（一六八六）年に書いた「縁起」中に「寛弘三年」と記すのは、寺伝によるものと考えられ、もともとの寺伝が「寛弘三年」であったのに基づいたと考えるべきであろう。その後、寛保元（一七四一）年の『防長寺社由来』「峨嵋山普賢寺由来記」、天保年間（一八三〇～一八四四）の『防長風土注進案』「熊毛郡室積村風土記」において、他書に記すところによって修正が図られたのではないだろうか。

岩田茂樹「圓教寺奥院開山堂の性空上人坐像について」（『鹿園雑集』奈良国立博物館紀要　第一一号　三五～四七ページ　平成二一年三月）には、書写山円教寺の開山堂の本尊である木造性空坐像がX線撮影され、性空上人の遺骨を納めた瑠璃壺が内蔵されていることが明らかとなったことが詳細に報告されていることから考えるに、性空上人が室積に葬られたというこの記述は、事実ではないと思う。

○本縁由伝

縁起由来。

○尚

久しい。

○符節

割り符。（割り符のように）ぴったりと合うこと。

○鄙俗語

卑しく低俗な言葉。

○瑞巌

『防長寺社由来』熊毛宰判　室積村　普賢寺　普賢寺由来記に「廿八世中興瑞巌寂元和尚　予州大津産　元禄十六年　　酉ノ正月七日寂ス」とある。

○毛利市正大江就直

毛利就直〔もうり　なりなお　寛永一三（一六三六）年～宝永六（一七〇九）年〕は、長州藩一門家老・毛利元法の次男。後に吉敷毛利元包の養子となり、寛文一一年（一六七一年）に元包の隠居により家督を相続した。藩主毛利綱広、吉就、吉広、吉元に仕えて、当職（国家老・執政）を務めた。通称は外記、市正、主殿。〔以上は、石川卓美『防長歴史用語辞典』による〕

「市正（いちのかみ）」は、正六位上相当の官位。毛利氏は大江氏を祖先とするため「大江」を名乗る。

○当路

重要な地位にいること。また、その人。この時、毛利就直は、長州藩の当職（国家老・執政）であった。

○使僕修其縁起、以可伝遠編成。就直装復成軸、以寄附于娥媚

『防長風土注進案』熊毛郡室積村風土記　寺院　禅宗峨嵋山普賢寺寺寶の項に「普賢縁起　　貞享年中山田復軒先生撰述同筆、表粧上箱共ニ毛利市正様御寄附」とある。

○貞享三年

西暦一六八六年。

○季秋　初三日

陰暦九月三日。

○復軒山田原欽

山田原欽〔やまだ　げんきん　寛文六（一六六六）年～元禄六（一六九三）年〕　江戸時代前期の儒者。宇都宮遯庵、伊藤坦庵に学ぶ。長門萩藩主毛利吉就に世子時代からつかえる。東光寺建立の件で吉就に諫言したがいれられず、元禄六年七月一四日自刃した。二八歳。周防出身。名は頼熙。号は復軒。〔『デジタル版　日本人名大辞典+Plus』の解説による〕

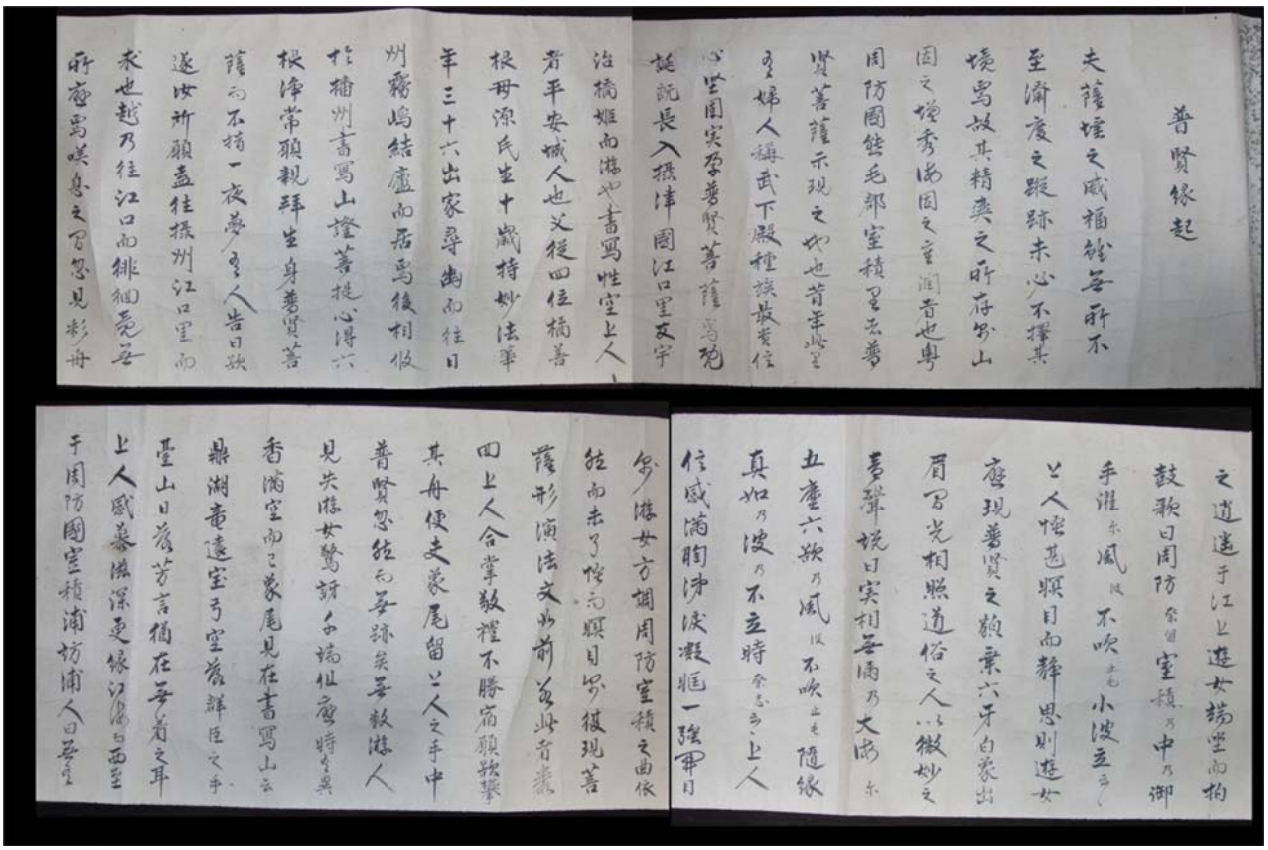
なお、山田原欽については、渡辺健司『近世大名文藝圏研究』（八木書店刊　平成九）中の第二部に載せる「山田原欽の前半生 - 近世初期文壇との交流」（二五四～二七四頁）および「山田原欽の死 - 長州初期儒学の状況」（二七五～二九一頁）に詳しい。

【付】以下にあげる写真は、普賢寺の現住である桝野省堂氏に許可をいただき、掲載するものである。

写真①　普賢示現の額絵　（筆者撮影）

原本の額絵は、平成三（一九九一）年の台風一九号襲来の際に甚大な損傷を受けて修復不能であり、この写真は、それ以前に撮影したものとのこと。

写真②の一　山田原欽直筆「普賢縁起」一

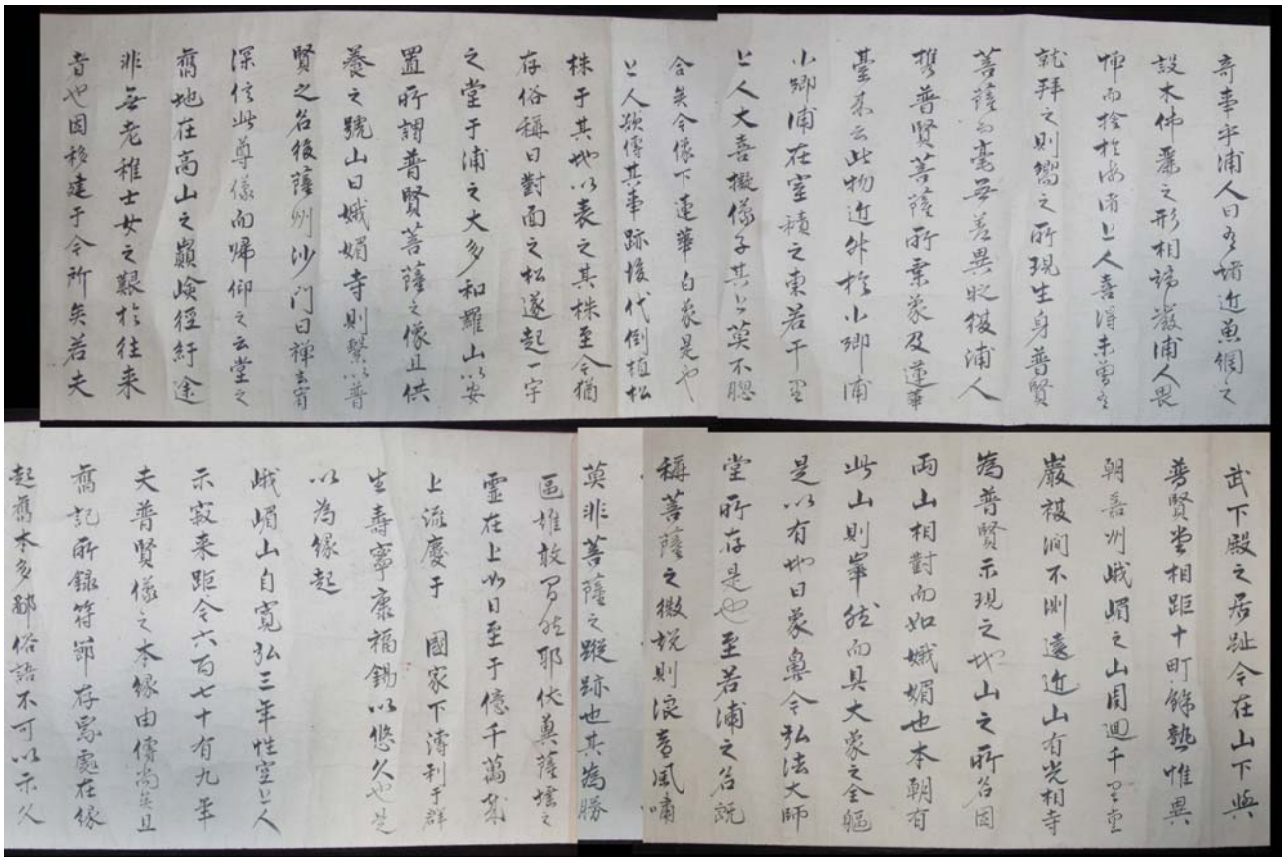


普賢縁起

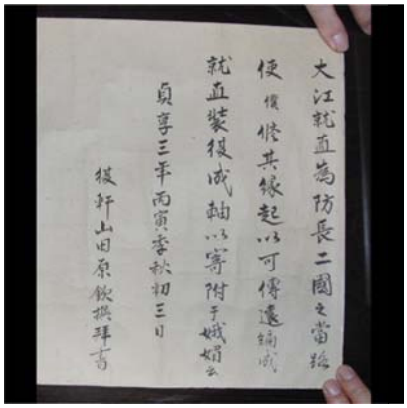
夫薩埵之威福能善所不
至濟度之跡未必不擇其
機曷故其精奥之所存分山
固之埃秀而固之室潤者也專
周防國能毛郡室積里在善
賢菩薩示現之地也背平岳望
海婦人稱武下殿種族最貴住
心坐国実孕善賢菩薩焉兆
誕既長入摂津國江口里文字
治橘姫而為書寫性空上人、
背平安城人也父從四位橘善
根母源氏生十歳持妙法華
年三十六出家尋幽而往日
州霧嶋結廬而居焉後相伴
於補州書寫山隆善提心得六
根清常願親拜生身善賢菩
薩而不持一夜夢多人告曰願
遂汝所願盗往摂州江口里而
求也越乃往江口而徘徊尋之
所在焉嘆息之間忽見彩舟

之道遥于江上遊女揺櫓而拍
鼓歌曰周防室積乃中乃御
手濯乃風不吹小波立乃
上人怪思眼目而静思則遊女
唐現善賢之顔黄六牙白象出
眉間光相照道俗之人微妙之
音聲説曰実相無乃大海乃
五塵六欲乃風不吹隨縁
真如乃波乃不立時余忘而上人
住感涌胸沸波凝眶一強再目
多港女方調周防室積之曲依
結而去了悟而瞑目多彼現菩
薩形演法文如前多此音義
四上人合掌敬礼不勝宿願歓喜
其舟便走蒙尾留上人之手中
普賢忽結而無跡矣無跡人
見失港女驚訝而端仙座時多異
香滿室而蒙尾見在書寫山云
鼎湖童遠宝弓空蒙鮮臣之手
臺山日蓋芳言猶在無之耳
上人感慕深更緣江海日西至
于周防國室積浦坊浦人日暮

写真②の二　山田原欽直筆「普賢縁起」二



写真②の三　山田原欽直筆「普賢縁起」三



以上、山田原欽直筆の「普賢縁起」の全文の画像である。写真②の三の後の部分には、「性空上人碑」がつなげられており、一巻の巻子本の体裁である。なお、普賢寺には、二種の直筆が伝わっており、一本は、まさしく清書というにふさわしい品格の書であるが、撮影できなかった。ここに、掲げたのは、もう一つのものであり、途中に訂正も入っている。写真撮影は、本校機械電気工学科の藤本浩先生の手を煩わせた。写真を処理して繋げたのは筆者であり、判読の難等の問題は、すべて筆者の責である。

【謝辞】

今回の訳注にあたっては、徳山工業高等専門学校機械電気工学科の藤本浩先生が機会を与えて下さり、普賢寺のご住職桝野省堂氏にご協力いただくよう労を取ってくださった。普賢寺のご住職桝野省堂氏には、貴重な資料を提供いただき、その公開を許可してくださった。また、機械電気工学科の三浦靖一郎先生からは、再三にわたり、地域貢献の観点から有意義であることを説いていただき大いに励まされた。藤本先生、桝野住職、三浦先生にあらためて感謝の意を表しておきたい。